

人権なら

2023年10月1日

第154号

NPOなら人権情報センター

●ひと・まち・生き生き

「助けて！」と言える関係づくりを

第14回奈良県「差別と人権」研究集会を開催

第14回奈良県「差別と人権」研究集会が9月2日、田原本青垣生涯学習センターであった＝写真。実行委員会が主催。300人が参加した。



古川友則・理事長、県文化・教育・くらし創造部の舟木豊・部長、磯城郡町村会長の森章浩・田原本町長がそれぞれあいさつ。知事らの祝電が披露された。

奥田知志・抱樸(ほうぼく)理事長が記念講演

記念講演は奥田知志・NPO抱樸(ほうぼく)理事長(写真)が「『助けて』と言える国へ困窮者支援の現場から」の演題で語った。奥田さんは北九州市で30年以上にわたってホームレス支援に取り組んでいる。



ホームレス問題には「経済的困窮(ハウスレス)」と「社会的孤立(ホームレス)」の二つの側面がある。「ハウス」と「ホーム」は違う。全国的にハウスレスの支援しかなされていない。両側面から取り組むことが貧困との闘いで、「平和を創り出す」ことにもつながる、と。

ハウスレスとホームレスの2つの側面がある

今、炊き出しに来る人はホームレスだけでなく、地域の人が増えた。他者との関係がなくなっている。「助けて！」と言えない人が多い。理由には絶望もある。これからの街づくりには、伴走型の支援が必要だ。つながりが大切。今までは家族がいた。今は一人だ、と。

「自分の命はどうしても良い命」だと言う20歳の女性と

関わり、つながりや出会いが大事だと感じた。

人間には「縦の成長」と「横の成長」がある

人間には「縦の成長」と「横の成長」があるという。自立支援は縦の成長で自己責任を求めがち。横の成長をつくっていかないといけない。子ども食堂が全国で7000箇所ある。月2回だけで命を守れるのか、と考えがちだが、やることでつながり、友だちになれると。

家庭、地域が壊れ、モノだけで勝負する社会に

「孤独を感じる人」は日本が断トツだ。高橋源一郎さんと対談した。「つながりがことばを生む」と。家庭、地域が壊れ、モノだけで勝負する社会に変わった。「つながり、ことば、物語」が大事。国にさせてはダメだと。

子どもの自殺が2022年514人。誰にも相談しない。助けて、と言えない。「他人に迷惑を掛けてはいけない」と。家族の形態は2020年で単身世帯が38%。結婚しない男性が3割。ケアの社会化が必要だと。

奥田さんは自ら体験した具体例を挙げながら、分かりやすく語った。参加者はその話に胸を打った。

地域で活動する4人がパネルディスカッション

パネルディスカッションでは、県内で「地域づくり」の活動する辻本恵則さん(東吉野村まちづく

りNPO代表)と蛭原能里子さん(あいの



家小規模多機能居宅介護事業所ケアマネージャー)、廣瀬朋さん(NPOアクティブセンターうだ理事長)、明見美代子さん(一般社団法人なら人材育成協会理事長)の4人がそれぞれの活動を報告し、生きやすいまちづくりについて語り合った＝写真。

「私の故郷は植民地だった」

崎浜盛喜さんが三宅町人権学習講座で講演

三宅町地域人権学習講座の第3回が9月14日、まちづくり交流センターであった。35人が参加した=写真。



奈良-沖縄連帯委員会代表の崎浜盛喜さん(写真)が「私の故郷、沖縄は植民地だった」と題し話をした。

沖縄に対する日本政府の過酷な歴史の歩み

崎浜さんは1947年に沖縄県瑞慶覧で生まれた。敗戦後の米軍統治下で国費留学生として奈良県内の大学に入学。以来、奈良で暮らしている。

崎浜さんは日本政府の沖縄に対する歴史を語った。

1879年、琉球を武力で併合。琉球王国の王、尚氏一族を東京に連行。王国は滅亡した。その後、皇民化や同化政策によって、言語を奪い、経済的に搾取してきたと。



沖縄戦では、米軍が本島中部に上陸。沖縄は日本本土の「捨て石」として地上戦に巻き込まれた。県民の4人に1人が亡くなるまでの消耗戦が展開された。壕に避難していた住民は米軍のガス弾により数多く亡くなった。捕らえられた住民は収容所に入れられた。

米軍は住民がいなくなった瑞慶覧でもブルドーザーで家屋を破壊し、基地を建設した。戦後も米軍による様々な事件・事故により多くの住民が死傷している。

琉球人遺骨返還請求訴訟が問うているもの

話は現在、闘っている遺骨返還訴訟に及んだ。京都帝国大学医学部助教授だった金関丈夫が1928年、沖縄北部今帰仁村の百按司墓(むむじゃなばか)に風葬されていた遺骨を盗掘した。この墓は琉球王国を建設した第一尚氏の墓だ。尚氏の子孫ら原告5人が2018年、遺骨の返還を求めて京大を提訴。京都

地裁は2022年、請求を却下した。控訴審の大阪高裁でこの9月22日に判決が出ると語った。

性の多様性を知ろう

中田ひとみさんが河合町人権学習講座で講演

河合町人権学習講座が9月8日、中央公民館であった。31人が参加した=写真。「性と生を考える会」代表の中田ひとみさん



(写真)が「性の多様性を知ろう～みんなが自分らしく生きるために～」と題し話をした。

中田さんは身体的な性と、自分の認識する性との違いや、社会に求められる男・女らしさなどの社会的な役割との違いに苦しむ人たちの現状を説明した。

幼くして自分の見た目の性と、自我が持つ性との違いに悩む子どもや、思春期に自分が異性ではなく、同性に対して心を動かされ、思い悩んだ末に自死を選んだケースなど、周囲に相談できなかった事例を色々と紹介した。

性のありようは多様。すべての性はオンリーワン

「男か女」「異性性愛者」に限らず、これまでの当たり前や常識を見直すこと。表現や「らしさ」も多様なこと。

人と人との関係性や、「家族」の形も多様で、見た目ではわからない。決めつけないことが大切だ。自分のことを、いつ、誰に、どのように説明するのかは、自己決定を尊重す



る。カミングアウト(秘密の告白)や、アウティング(他人の秘密を暴露する)には、とくに注意を払うことだと。

また、奈良県における現状などを、数字を挙げて説明した。県における取り組みの一環を知ることができた。最後に、性のありようは多様であり、性的マイノリティかどうかに関係なく、すべての性はオンリーワンであると強調した。

「平和と人権」テーマに交流祭

12月開催へ第29回生き生き交流祭実行委

第29回生き生き交流祭の第1回実行委員会が9月6日にあった。

この3年間はコロナ禍のため、開催を控えてきた。交流祭は、



NPOなら人権情報センターが三宅町からの委託事業として開催。町内の各種団体・個人に協賛を呼びかけ、実行委を結成して取り組んでいる。

ことしのテーマは「平和と人権」。ロシアのウクライナへの軍事侵攻以降も、世界では多くの命が失われている。戦争は平和な暮らしを破壊し、大切な命を奪う。私たちに今、何ができるのか。今回の交流祭を通して考えることにしている。写真

玉本英子さんを迎え、「ウクライナを知り考える」

開催日は12月3日。実行委員長には、なら人権情報センター理事長の古川友則さんを選任した。当日は朝10時からオープニングセレモニーと開会行事。そのあと、MiiMo広場で出店や石見文庫の絵本の読み聞かせなど。午後は文化ホールで式下中学校の吹奏楽部と、ひまわりの家「美術部」とのコラボ劇「てぶくろ」。続けて、吹奏楽部の演奏で文化交流を図る。

今回、フリートークも予定。映像ジャーナリストの玉本英子さんを迎え、「ウクライナを知り、考える」をテーマに現地取材した話をしてもらう。また、ウクライナから避難し、天理大学で学ぶ学生からも話を伺う。

「絵の本ひろば」で遊んだよ！

読みたい本に出会え、子ども居場所づくり

「絵の本ひろば」&「みんなであそぼう会」を9月22、23両日、三宅町あざさ苑で行いました。参加者は22日が61人。23日が50人でした。幼児から高校生

や大人まで、いろんな方が来てくれました。

「絵の本ひろば」は大人も子どもも自分で好きな絵本が選べ、読みたい本に出会えます。飛鳥・櫃原ユネスコ協会から400冊をお借りし、段ボールで作成した面展台40台に並べました＝写真。



ゾウとブタのセリフ掛け合いで絵本を楽しむ

「絵の本ひろば」発案者である「絵本あれこれ研究家」加藤啓子さんが設営や展示のアドバイスをしてくれました。好きな本を座り込んだり、寝ころんだり、顔をつき合わせたりして、手に取って楽しみました。

午後には、ひまわりのメンバーがやってきました。加藤さんがゾウとブタのセリフの掛け合いの絵本を読むとゾウ役とブタ役になってくれました。やっている人も見ている人も笑顔が素敵でした。「こんな絵本との出会いもあるんやー」と感心しました。



楽しいことだらけなので止められないなあ

23日は「みんなであそぼう会」。絵本を見たり、ボードゲームをしたり、小学校の運動場や、健民グラウンドへ行ったり…。子どもサポーターは加藤さんの話に前のめり。くすっと笑ったり、え〜っ、と驚いたり、心が動いていました。

片づけは「手伝って〜」のひと言でみんな集まり、ばらばらに置かれた本を番号順に箱入れ、駐車場まで手運びしました。みんな友だちと名残惜しそうに話していましたが、「また会おうね」と帰っていきました。

「絵の本ひろば」はおもしろい本と出会え、誰かに出会え、楽しいことだらけなので、止められないなあ、と思いました。なお、今回の「絵の本ひろば」の様子は「<http://ehonarekore.blog65.fc2.com/>」（加藤さんのブログ）に。（子どもの居場所づくりをつくろう会・山本薫）

遺骨返還訴訟の控訴を棄却

判決文では「返還は世界の潮流に…」と「付言」

琉球遺骨返還請求訴訟控訴審で大阪高裁は9月22日、原告側の控訴を不当にも棄却した。

担当してきた大島眞一裁判長が9月で定年退職したため、別の裁判長が判決文を代読。「主文。1、本件各控訴をいずれも棄却する。2、控訴人亀谷正子及び控訴人玉城毅の当審における追加請求をいずれも棄却する。3、当審における訴訟費用は全て控訴人らの負担とする」と述べ、即、退席。わずか1分で閉廷した。京大側は姿を見せなかった。



「遺骨はふるさとで静かに眠る権利がある」

終了後、弁護士会館で報告集会＝写真。原告の玉城毅さん、亀谷正子さん、金城実さん、松島泰勝さんと、弁護団の丹羽雅雄、普門大輔、李承現、定岡由紀子の各弁護士がそれぞれ感想や意見を述べた。

この場で明らかにされたのは、判決文には「付言」

編集後記 ☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

高騰する物価、極端な気候変動などで人々の生活が脅かされている。生きづらさを抱え、苦しんでいる人も多い。社会を嫌な空気が覆い、軍拡など逆噴射の悪政が続く。なのに、首相は「明日は今日よりも良くなる」と吐く。逆撫でする暴言だ。こんななか、地域から世直しする動きが起きている。各地で結果も出ている。自治意識が芽生え、まともな人々が声を上げるようになった。若者も女性も大勢が集会、デモする。良い兆しに希望が湧く。既成政党、組織は見放されてきた。これらに頼らずに、人と人がつながり、輪を広げ、地域から変えていく。そのことしか社会を良くする術はない。

が記されていたことだった。「遺骨の本来の地への返還は、現在世界の潮流になりつつある」「遺骨は、単なるモノではない。遺骨は、ふるさとで静かに眠る権利がある」「持ち出された先住民の遺骨は、ふるさとに帰すべき」「日本人類学会から提出された、将来にわたり保存継承され研究に供されることを要望する書面に重きを置くことが相当とは思われない」と。

「関係者が話し合い、解決に向かうことを願う」

さらに、「訴訟における解決には限界」だとし、「京都大学、控訴人のほか、沖縄県教育委員会、今帰仁村教育委員会らで話し合いを進め、適切な解決への道を探ることが望まれる」「まもなく百按司墓からの遺骨持出しから100年を迎える。今この時期に、関係者が話し合い、解決へ向かうことを願っている。『無縁塚のべんべん草の下に淡い夢を見ていた骸骨』(琉球新報)は、ふるさとの沖縄に帰ることを夢見ている——」と。

評価に値する「琉球民族は先住民族」認定

各弁護士らは、判決は棄却だったが、「付言」での記述や、「人骨ではなく遺骨としたこと」「琉球民族は先住民族としたこと」など、今後の闘いへの指標になるとして判決文を評価した。



大島裁判長の訴訟指揮ぶりをみてきた人たちは、判決に一縷の望みを抱いてきた。京大は返還を拒否し続け、裁判長にさえ保管状況を確認させなかった。この悪質な対応に「関係者の話し合いで解決」など、とても期待できない。「返還命令」を出すべきだった。

ニュースレター「人権なら」

発行:NPO法人なら人権情報センター

〒636-0223

奈良県磯城郡田原本町鍵301-1

TEL:0744-33-8585/FAX:0744-32-8833

E-mail:info@nponara.or.jp

http://www.nponara.or.jp/